

おふでさきの 世界を歩く

第

12

回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】
本部准員
天理教校本科研究課程主任

三号 1—27 (その1)

三号 1—6
真実に掃除をしたるその後は

このたびハもんのうちよりたちものを
はやくいそいでとりはらいせよ
すきやかにそふぢしたてた事ならば
なハむねいそぎたのみいるそや
しんぢつにそふぢをしたるその、ちハ

(三 1)

(三 2)

神一ぢよで心いさむる
だん／＼とせかいの心いさむなら
これがにほんのをさまりとなる
いま、でハなによの事もハかりない
これからみゑるふしぎあいづが
こんものにむりにこいとハゆうでなし
つきくるならばいつまでもよし

(三 3)

(三 4)

(三 5)

(三 6)

〈建物早く急いで取り払いせよ〉

第三号の冒頭では、あらためて「やしきの掃除」が話題とされています。具体的には、「おやしき」にいる人々の心を澄ます、「おやしき」のありようをきれいにする、ということです。

「やしきの掃除」については、第一号、第二号において、すでに強調されましたが、あらためてそのことを徹底しようとされたのではないでしょうか。心が澄むというのは、それほど難しいことなのかもしれません。

1のお歌は、「このたびは、おやしきの門の内から、あの建物を、早く急いで取り払うようにしてもらいたい」という意味のお歌です。

「当時中山家の屋敷内には秀司先生と内縁関係の婦人の住居すまい」があり（※1）、それがここで言われる「たちもの（建物）」です。貧のどん底時代に建てられた掘っ立て小屋のことです。これを取り払ってしまうことを通して、皆の心をすっきりと掃除しようとなされたのです。

第一号の場合は、おちゑを「おやしき」から出すように言われ、ここでは建物を取り払うようにと命

じられています。教祖は、具体的な、それも思いきった行動を通して、胸の掃除を進めようとされたのです。

〈縄棟を急いで頼む〉

そうして建物を取り払い、「おやしき」の人々の心すすきりと掃除した後は、今度は「縄棟」を急いで頼むと言われます（2）。「縄棟」とは、「建築をする場合になわを張ってその位置を示すもの」です（※2）。つまり、普請に取り掛かってもらいたいと言われているのです。

伝えられるところによりますと、このとき教祖は、住居とは別に、教えを説くための場所を建ててもらいたいとお急せき込みになったそうです。しかし、当時の「おやしき」はまだまだ経済的に厳しい状態でした。信者の人々が話し合い、真実を出し合ったうえで、ようやく普請に取り掛かることになったのが、現在、記念建物として保存されている「中南の門屋」です（※3）。「中南の門屋」の竣工しゅうこんは、明治八（一八七五）年であり、完成まで二年ほどの歳月を要したのです。



なお、一般に、門屋に住まいするのは、その家に働き手として雇われている者です。そして、門屋は、外と内との接点、外の世界と直接、接する場所でもあります。教祖は、「つとめ場所」の上段の間からそこに移られたのです。このことは、教祖が積極的に表へ出て、「たすけ」を現される姿勢を、象徴的に示されたものと理解することができでしょう（※4）。

教えを説くための場所を建ててもらいたいとの思召おぼしめしと併せて考えるとき、教祖は、これから広く世界に向かつて道を伝えていこうとなされているのです。

〈神一条で心が勇んでくる〉

3と4は、1と2を受けてのお歌です。

すなわち、真実にすつきりと掃除をしたら、そのあとは、「おやしき」の中は、名実ともに神一条（の屋敷）となり、そばにいる皆の心が勇んでくる。さらに、その様子を見て、親神様のお心もまた勇むこととなる（3）（※5）。

そうして、「おやしき」で「おつとめ」の準備が整えられ、だんだんと布教伝道も活発に行われるよ

うになったら、いずれは世界の人々の心も勇んでくるようになる。このようにして、世界中の人々の心はすべて「にほん」の心となり（つまり、親神様の思いに基づいて生きるようになり）、この世界は確かに治まってくると言われているのです（4）。将来の道筋を述べておられるのです。

〈これから見える不思議合図が〉

外冊げさつ中山本では、5のお歌の右肩に「十月三日」

と日付が書き入れられています。5と6のお歌は、明治六年陰暦十月三日に記されたと推察されます。

4で述べられたような事柄は、第三号の執筆を開始された時点では、まだ何も現れてはきていません。

しかし、これからその兆候が、「不思議合図」が見えてくると言われています（5）。

ここでの「不思議合図」とは、具体的には、親神様のてびきによって、次々と人が寄ってくるようになることです。

「やしき」の掃除をし、神一条となり、そばの心が勇んできたなら、それが合図（きっかけ）となつて、親神様が勇んで働かれることになる。それによって、



大勢の人が「おやしき」へやって来るようになると言われているのです。

ただし、親神様は、来ない者、来たくない者に無理に来いとはおっしゃいません。しかし、この道を慕ってついてくるならば、いつまでも結構に通ることができるようになると言われているのです(※6)。

三号1―6では、「やしき」の掃除を話題の糸口として、将来の道はこのようになっていくと、その展望が示されています。そして、「やしき」の掃除から、次に心を澄ますということへと話題は展開しています。

三号7―14 「しんのはしら」を早く入れたい

これからハ水にたとえてはなしする

すむとにぎりでさとりとるなり

しんぢつに神の心のせきこみわ

しんのはしらはやくいれたい

このはしらはやくいれよをもへども

にごりの水でところわからん

この水をはやくすまするもよふだて

(三 7)

(三 8)

(三 9)

すいのとすなにかけてすませよ (三 10)

このすいのどこにあるやとをもうなよ

むねとくちとがすなとすいのや (三 11)

このはなしすみやかさとりついたなら

そのまゝ、いれるしんのはしらを (三 12)

はしらさいしいかりいれた事ならば

このよたしかにをさまりがつく (三 13)

このはなしさとりばかりであるほどに

これさとりたらしよこだめしや (三 14)

〈水にたとえて話す〉

外冊中山本では、7のお歌の右肩に「十日」という日付があります。

「これからは、水にたとえて話す(7)」とありますが、何を水にたとえられるのかというと、それは人の心です。「澄む」というのは、人々の心に「ほこり」がなくてきれいな状態、「濁り」というのは、人々の心に「ほこり」が積もっている状態を指します。人の心という形のない捉えどころのないものを、水にたとえて分かりやすく聞かせるから、言わんとするところを悟ってくれと望まれているのです。

具体的には、「おやしき」周辺にいる人々の心が、泥水のように濁ってしまっているから、それを一人ひとり心のあり方を振り返って、悟った者から心を澄ますようにしてもらいたいと言われているのです。

《しんのはしら》とは

それでは、なぜ心を澄ますことを望まれているのか。その理由が記されているのが、8のお歌です。

「しんのはしら」（しんばしら）を早く入れたいと急ぎ込んでいる」と述べられています。

「しんのはしら」（しんばしら）は、世間一般では「心柱」と表記して、建物の中央部に配置される柱のことを指します。主に日本の木造建築、特に五重塔などの仏塔に使用され、建物の構造上、非常に重要な役割を果たします。塔の重心を安定させ、一種の免震装置として働くことで、建物の揺れを軽減する効果があるそうです。

そうした建築用語から派生して、地方によっては、中心となる人物、家の主や家を支える人のことを「しんばしら」と言う所もあるようです。親里近辺でも、その昔は、家の主のことを「しんばしら」と

いう言い方をすることがあったそうです。

そのほか、心の内に持つ、揺るがない信念や感情、ぶれない指針のたとえとして用いられることもあるそうです。

「おふでさき」における「しんのはしら」も、基本的にはこのような世間一般の用法に基づくのですが、特別な意味が込められています。「しんのはしら」（略して「しんばしら」「はしら」とも言われる）には、①「かんろだい」という意味と、②「真柱」の意味と、③「心の拠り所」という意味があります。特に大事なものは、①と②の意味です。「しんのはしら」という一つの言葉で、これら二つを同時に表現している点は、非常に興味深いところです。「かんろだい」と「真柱」は密接に関連しているのです（※7）。

《濁りの水でところ分かん》

8の「しんのはしら」を入れたいとは、「おやしき」に「かんろだい」を据えるときにも、「真柱」を早く迎え入れたいということです（※8）。

「かんろだい」については、この明治六年に、教祖

は飯降伊蔵に命じて、「かんろだい」の模型を製作されましたが、旬が来るまで（明治八年まで）、倉に収めたままにされました。

一方、この道の芯である「真柱」について、教祖は、慶応元（一八六五）年に梶本おはる様が懐妊したときから、

「今度、おはるには、前川の父の魂を宿し込んだ。しんばしらの真之亮やで」

（『教祖伝』66ページ）

とおっしゃっていました。

そして、慶応二年五月七日、梶本家の三男として誕生されたのが、真之亮様です。「おやしき」に、このやしきのしんばしらと成るといのは、生れ出ん先からのいんねんの事情、一つの理。分からん先から先にしんばしらと言ふも、前々より論してある。

（明治23・4・20）

と論されるように、魂の「いんねん」によって、真之亮様を真柱と定められたのです。

真之亮様は、明治六年で数え八歳、梶本村（現在の天理市梶本町）の梶本家から「おやしき」へ通われ、教祖は家族同様にかわいがられていました。

教祖は、真之亮様を一日も早く「おやしき」に引き寄せたいと望まれたのですが、その思召が皆に徹底していたわけではなかったのです。ご執筆当時は、秀司様ご夫妻は、ご結婚されてから数年しか経っていません。「お二人の間に、まだお子様はないが、もし男の子が生まれたら、どうするのか。なぜ教祖は、中山家以外にこれを求めようとされるのか」という心配が周囲の人々にあり、人間思案から教祖のお心を測りかね、おのおの勝手な考えを抱き、なかなか心が一致していなかったと言われています（※9）。

このことだけでなく、1で「やしきの掃除」に言及されているように、そばにいる皆の心がどこか「ほこり」で濁ったような状態になっていたのかもしれない。

9で「この柱を早く入れようと思うけれども、濁りの水でどこに入れたらよいか分からない」とおっしゃっているのは、このような「おやしき」の状況を受けてのものです（※10）。

皆の心が「ほこり」まみれの汚れたままでは、「おやしき」に「かんろだい」を据えることもできない

し、「真柱」を迎え入れることもできない。そこで、早く心を澄ます準備をしてくれ、と言われるのです。

《胸と口とが「すな」と「すいの」や》

それでは、どのようにして濁った水を、汚れた心を澄ましていくのか。10では、「すいの」と「すな」にかけて澄ますようにせよと教えられます。

「すいの」とは、水すい囊のうのことで、水を漉こして虫やゴミなどを取り除く布囊ふのうや、水を切るために用いられる目の細かいふるいのことです。そして、ここで言われる「すな」とは、樽たるや桶おけなどの底に砂利、砂、木炭などを盛り、水あかや雑物を取り去り、水を澄ます用器、いわゆる水漉しのことです。

ですから、「すいの」と「すな」とは、濾過ろか装置のことです。バケツや樽のような容器に、きれいな砂などを何層にも入れ、その容器の上に、ゴミなどを取り除くためのふるいがかけられている図を想像していただきたいと思います。この容器に、上から濁っている水を入れていきます。濁った水は、まずふるいを通ることでゴミが取り除かれ、さらに、その水が砂の層を通ることで、きれいな水となって下

から出てくるのです。

このような濁った水を、澄みきった水に変える装置が、「すいの」と「すな」になります。教祖は、人々の汚れた心を澄ますには、このように「すいの」と「すな」にかけるようにしてするのだと教えられたのです。

「すいの」と「すな」はたとえばです。それでは、「すいの」と「すな」が指し示すものとは何なのか。「すいの」と「すな」にかけて澄ますとは、具体的にどうすることなのか。

11では、「むね」と「くち」とが「すな」と「すいの」である。つまり、胸と口とで濁った心を澄みきらすようにとされています。

私たちは普段生きているなかで、周囲の状況を喜べなかったり、腹が立ったり、もんもんと心を曇らせたりすることがあります。濁った水の中にいるかのような状況に置かれていることがあります。

しかし、たとえばそのようななかであっても、「むね」「すな」を教えに基づく自分の心一つの「悟り」によって、その状況を喜びに転換することができま



す。目や耳から入ってくるものは喜べないものであっても、口から出てくる言葉は、「ありがたいな」「うれしいな」といったきれいな言葉を出すことができます。自分たちの「むね」と「くち」こそが、「すな」と「すいの」であるとは、このようなことを指して言われているのではないかと思案します(※11)。自分自身で親神様の思召をよく思案して、悟らせていただく。そして、口から出す言葉によってその思召を伝え、周囲の心を明るく澄んだものとさせていただく(※12)。そのような「悟り論し」によって、少しずつ「おやしき」周囲の人々の心を澄ますようにしてくれ、「うち」において「論し合い」をしてくれと望まれているのではないのでしょうか。

〈自らの胸を澄ますことから〉

ここで、もう一つ大事なことは、そのためには、まず自分の心を澄ますことが大事だということです(※13)。濁った水を、濾過装置にかけて澄まそうと思っても、容器の中にある砂が汚れてしまっていては、下からきれいな水は出てきません。砂はきれいにしておかねばなりません。砂が汚れたと思っ

たら、砂を洗い替える必要があります。

10のお歌で「澄ます模様(準備)をしてくれ」と論されていますが、これは、自分自身の胸をまず澄ますようにしてくれと望まれているのではないのでしょうか。周囲を批判するのではなく、気づいた者から、自分の胸を澄ます努力をし、そして、その澄んだ心で、周囲の人の心も澄ますようにしてもらいたいと論されているのではないかと思案します。

〈すみやか悟りついたなら〉

そのようにして、そばにいる皆の心が澄んで、親神様の言われることを聞き分けられる(悟ることができる)ようになったら、そのまますぐに「かんろだい」を据え、「しんばしら」を迎え入れる(12)。「かんろだい」を据え、「しんばしら」を迎え入れることさえできたら、この世は確かに治まりがつくのだ(13)、とこのように言われています。

「この世(人間が生活するこの世界)は確かに治まりがつく」と言われていますが、親神様の目からご覧になって、「かんろだい」と真柱は、それほど意義深いものなのです。特に、「かんろだい」につい

ては、次のようなお言葉があります。

さあかんろだいという理何と思うて居るか。その明かりで照つてある。

(明治40・4・10)

〈これ悟りたら「証拠試し」や〉

14では、「この今している話は、人間の考えでは分からない、心を澄まして悟るばかりの話である」と言われています。つまり、言い換えると、早く心を澄まして、悟り取ることができるところまで成人してくれと、成人の努力を促されているのです。

そうして、悟りがつき、「かんろだい」が据えられ、真柱を迎え入れることができたなら、それから、いよいよ「証拠試し」に掛かると言われています。

「証拠試し」については、三号22―23に出てきますので、そこで説明します。要は、「証拠」となる「試し」のことを指します。「かぐらづとめ」によって、親神様の不思議珍しい働きを、人間の目に見えるような「たすけ」として現し、そのことによって、親神様（教祖）のお話が間違いない真実の話であるという「証拠」を出すと言われているのです。

※1 教義及史料集成部
編『おふでさき講義』道
友社、昭和4年、42ページ

ジ。(同書は『みちのと
も』昭和3年11月20日号
を体裁を改めて再版した

もの)
※2 『おふでさき註釈』
参照。

おふでさき
の世界
を歩く

- ※3 教義及史料集成部編『おふでさき講義』43—44ページ参照。
- ※4 以下を参照。
石崎正雄「建築から見た教祖伝」『天理大学おやさと研究所研究報告会報』第5号、1991年。
中島秀夫「教祖の道すがらにみる象徴性——普請史の一局面で」『天理教学研究』第36号、平成10年。
- ※5 教義及史料集成部編『おふでさき講義』43ページ。
- ※6 「いつまでもよし」の解釈について『おふでさき註釈』は、「慕うて来る者は末代までも安心の道が得られる」と記している。三号6のお歌は、「みかぐらうた」の七下り目6から10までのお歌と対応していると理解する。
- ※7 「ちば定め百年——第三回・教理篇（その二）」（『みちのとも』昭和50年8月号、34—35ページ）を参照されたい。
- ※8 ただし、前掲「しんのはしら」（しんばしら）の③の意味も含んでいると解釈することも可能である。その場合は、そばの者の心に「神一条」という柱を立てたら（信念が入ったら）、という意味になる。
- ※9 当時の「おやしき」の様子については、教義及史料集成部編『おふでさき講義』44—45ページ参照。
- ※10 次のようにも言われている。
「にぎり水はやくすまさん事にてわ しんのはしらのいれよふがない」
（三 66）
- ※11 「むねとくちとがすなとすいのや」の解釈については、澤井勇一『おふでさきを読む』（道友社、立教161年、202—203ページ参照）。
- ※12 教義及史料集成部編『おふでさき講義』45—46ページ参照。
- ※13 澤井勇一『おふでさきを読む』201、203ページ参照。